

- 五省訓**
- 1. 至誠に悖るなかりしか。
 - 1. 言行に恥ずるなかりしか。
 - 1. 氣力に欠くるなかりしか。
 - 1. 努力に感みなかりしか。
 - 1. 不精に亘るなかりしか。

五省会ニュース

発行所
医療法人財団五省会西能病院
〒930 富山市五福1130
TEL (0764) 41-2481(代)
発行人 西能正一郎

新しい時代の医療を目指す

＝増改築で設備を強化、近代化＝

安定したよい病院づくり

地域社会に奉仕する新しい時代の医療を目指す医療法人財団五省会西能病院は、五月二十三日、病院の第三期増改築工事の起工式を挙行了。完成は、五十八年二月の予定。
現在の病院建物(四階一部五階建て)を、さらに五階一部六階建てに増築、既設建築物を改善する。現在の病床百六床が百八十五床(六十九床増)に増床され、うち内科の病床が五十床ないし六十床新設される。

五月二十三日に起工式

各医療設備を強化、近代化すると共に、患者さんにとりやすいサ―ビスエリアを拡充して、安定したよい病院づくりをはかるもの。とくに、最近

快適な待合ホールに

患者サ―ビスを重視

喫茶ルームや売店も拡げ、二階、三階の病棟(いすれも八十二病床)、四階の個人病床(二十一床、うち特別室三床)の各階には、それぞれ患者用の風呂場、洗濯場、乾燥室を設ける。食堂、面会室、休憩室にゆとりをもたせ、入院患者のよい環境づくりをはかる。また、西側に隣接してエ

「よい病院」の条件

院内教育から

西能病院では、「よい病院づくりのために」をテーマにして、院内教育を開設した。毎月一回、同病棟四階会議室で開くもので、講師は同病棟の守内弘義業務した。

ふんどしと靴下

西能正一郎

昭和二十年の春、私は海軍兵学校生徒になった。その年の八月十五日の終戦まで、わずか四ヶ月余であったが、若冠十六、七歳の私達は、帝國海軍の干城(かんじょう)として、それこそ熾烈(しりつ)な訓練に明け暮れる毎日を送った。

今日を、今を、大切に生きる

今日でも、私の心身に染み付いて兵学校教育のすばらしさと、教育というものの重要性を今更(いまさら)に思い知らされるのである。
入校して三週間は入校教育期間として生徒となる基本的な教育が行われた。先ず最初に(しつけ)られたことは、毎日必ず洗った下着を身につけること、なかでも当時軍隊で採用していたジャパニーズパンツ、即ち越中ふんどし、そして軍足(ぐんそく)と称する靴下については、ちゃんと洗いさらしの骨となる身なり」と。

あすなろ

▼落語家の春風亭栄橋が昨秋、芸術祭優秀賞を受け、今春その記念パーティがひらかれた。その喜びの声をきいたが、そのときまで、栄橋が

接遇の心得帳

西能病院は、このほど「接遇の心得」のパンフレットを職員に配布した。これは、いろいろなやみいらいで来院される患者さんに接する関係上、今一度初心を返り、接遇問題を真剣に考え、全職員が心をあわせ、お互いに注意しあ

医療保険制度

について

わが国の医療保険制度は、健康保険(政府管掌、組合管掌)、船員保険、日雇労働者健康保険、各種共済組合、国民健康保険)に分かれており、職域によって加入する制度が違っています。
今回は、健康保険について調べてみたいと思います。健康保険は、会社などで働く一般被用者(被保険者)とその家族(被扶養者)を対象としており、次のような保険給付があります。

区分	被保険者	被扶養者
療養の給付	療養費	療養費
看護料	看護費	看護費
移送費	移送費	移送費
高額療養費	高額療養費	高額療養費
傷病手当金	傷病手当金	傷病手当金
出産手当金	出産手当金	出産手当金
育児手当金	育児手当金	育児手当金
退職したあと	退職手当金	退職手当金
死亡したとき	遺族厚生年金	遺族厚生年金
死亡したとき	退職金	退職金

この中で一般的にあまり知られていないものについて説明します。
傷病手当金
被保険者が病気を治すための療養のため働くことができず、連続して3日間以上働かなくなったときに4日目から、1日につき、標準報酬日額の6割に相当する額(被扶養者のない被保険者は4割相当)を一年六月間支給される。ただし、事業主から報酬を受けられる場合や、初診の日から3年を経過している場合には支給されない。
埋葬料(費)
被保険者が死亡した場合埋葬した者に支給される。家族が埋葬したときは標準報酬の一日分(最低五万円)に埋葬料。家族以外の方が死亡したときは、上記の範囲内で実費に埋葬費。
高額療養費
被扶養者が死亡した時は家族埋葬料として五万円支給。被扶養者(同一人)が同じ月内に、同じ病院で支払った自己負担額が三万円九千円をこえたときに、そのこえた額が支給される。
継続療養
一年以上継続して被保険者である者が、退職等により資格を失った場合、現に療養の給付(家族療養を含む)を受けている時には、その傷病について療養を開始した日から五年間、同様の給付がうけられる。

健康法の問題 (3)

矢野三郎

健康法といえども第一に運動をあげなければならない。現代はソファ時代で、三人座席が流行して、三人座席で運動不足である。健康法として運動は「年令、体力」にかかわらず、自明の如くである。これがなくなると、全くなるといふ。健康法としての運動は「年令、体力」にかかわらず、自明の如くである。これがなくなると、全くなるといふ。健康法としての運動は「年令、体力」にかかわらず、自明の如くである。これがなくなると、全くなるといふ。

翌日に疲労の残らない運動を

運動が人間の健康の維持に役立つことは大昔から経験的に知られてきた。東大の黒田教授によると、紀元前二千年頃、すでにインドや中国では健康法として「年令、体力」にかかわらず、自明の如くである。これがなくなると、全くなるといふ。健康法としての運動は「年令、体力」にかかわらず、自明の如くである。これがなくなると、全くなるといふ。

西能病院の思い出

西能病院に入院した三か月前までは、西能病院の思い出。西能病院に入院した三か月前までは、西能病院の思い出。西能病院に入院した三か月前までは、西能病院の思い出。西能病院に入院した三か月前までは、西能病院の思い出。西能病院に入院した三か月前までは、西能病院の思い出。

肥満に要注意

肥満というものが、実際に病気の危険因子になっている。肥満というものが、実際に病気の危険因子になっている。肥満というものが、実際に病気の危険因子になっている。肥満というものが、実際に病気の危険因子になっている。肥満というものが、実際に病気の危険因子になっている。



栄養士 二口雅子

眠れない大根の話

西能病院の職員、大根の話。西能病院の職員、大根の話。西能病院の職員、大根の話。西能病院の職員、大根の話。西能病院の職員、大根の話。

いま西能病院は

西能病院の現状と職員の話。西能病院の現状と職員の話。西能病院の現状と職員の話。西能病院の現状と職員の話。西能病院の現状と職員の話。

職員の意識改革促す

患者にはプラスαを志向

西能病院 理事 西能正一郎のインタビュー。西能病院の職員、意識改革を促す。西能病院の職員、意識改革を促す。西能病院の職員、意識改革を促す。西能病院の職員、意識改革を促す。

ねんりん

西能病院のあゆみ

春雪が舞うお彼岸入り。西能病院のあゆみ。春雪が舞うお彼岸入り。西能病院のあゆみ。春雪が舞うお彼岸入り。西能病院のあゆみ。春雪が舞うお彼岸入り。西能病院のあゆみ。春雪が舞うお彼岸入り。

患者第一号は坂本重一さん

総勢六人でスタート



開院当時の手術室の一部。いまの完備した設備にくらべると、簡素なものだ。

春雪が舞うお彼岸入り。西能病院のあゆみ。春雪が舞うお彼岸入り。西能病院のあゆみ。春雪が舞うお彼岸入り。西能病院のあゆみ。春雪が舞うお彼岸入り。西能病院のあゆみ。春雪が舞うお彼岸入り。

病院勤務一カ月の印象

この月から西能病院勤務一カ月の印象。病院勤務一カ月の印象。この月から西能病院勤務一カ月の印象。病院勤務一カ月の印象。この月から西能病院勤務一カ月の印象。病院勤務一カ月の印象。

いよいよ三月三十一日の開院日。西能病院のあゆみ。いよいよ三月三十一日の開院日。西能病院のあゆみ。いよいよ三月三十一日の開院日。西能病院のあゆみ。いよいよ三月三十一日の開院日。西能病院のあゆみ。

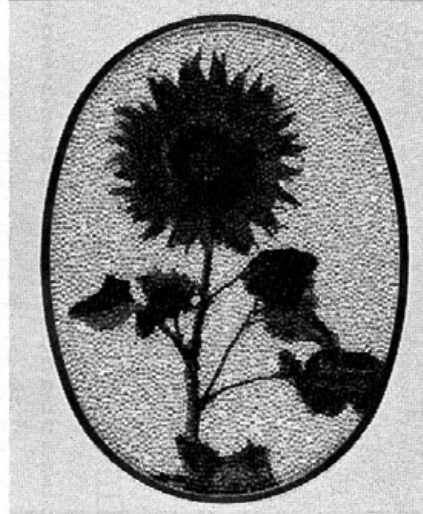
患者と病院の谷間埋める

“治療させていただく”心

西能病院の理念と職員の話。西能病院の理念と職員の話。西能病院の理念と職員の話。西能病院の理念と職員の話。西能病院の理念と職員の話。

わたしはこう思う

西能病院の職員、自分の考えを語る。西能病院の職員、自分の考えを語る。西能病院の職員、自分の考えを語る。西能病院の職員、自分の考えを語る。西能病院の職員、自分の考えを語る。



 ヒマワリの
 光をつかんだ
 黒瀬さんより、青い鳥保

松下さんが根気よくコツコツ丹精こめて作ったヒマワリのビーズの刺しゅうは、額にして西能病院医局に掲げてある。

写真説明

- ①は、池田さんが熱演する「涙の母」に、一生懸命にハートで伴奏する松下さん。
- ②は、寮母さんたちのキレイな花笠音頭。
- ③は寮母さんや局長さんたちによる合唱。
- ④は演奏を楽しむみずすず荘の人たち。(演奏会から)



大地を踏む

岐阜県古城郡神岡町西里通り

嫁禮着付バロメ美容院

塚腰実子さん(68)

セットの仕上げを見守る 塚腰さん

六十八才とは思えない。顔にも声にもツヤがある。実子さんは「のんきなんですよ。よう寝て、よう食うて、よう働いて、よう遊ぶで、ハハハ。足を引きずついても苦しめないですよ、ハハハ」。大声でよく笑う、気さくなおばさんだ。

美しいものが見えてきた

(第四信)

松下英勝

☆☆☆☆☆☆

「育園」の様子や元氣そうなる近況にあわせて励ましたの便りをいただきました。それから、見知らぬ女性より「人の噂にて貴方をケイベツしていましたが間違っていました」との告白の便りも……。

それも、これも、院長が自分ごときも大切に、大事に思ってくれておられるおかげさまと、心より感謝しております。

三十幾年間を生きて一度も理解されず故郷とも思えない富山を離れ、遠来の地にて身障者として、初めて少しずつ理解され、開花しようとしていますが、本當



ビーズの糸に富山を思う

数字で割り切れぬ人間の可能性

とかやってみようと、少しづつ根気よく、途中何度もたたきつけて、こわそうかと思ったり腹が立つこともありましたが、ビーズの一つ一つに富山を思い

りだせるものでなく、これからは、無名のチャレンジヤーとして、何にでも挑むつもりです。

ヒマワリの花言葉もわかりませんが、遠い昔、映画

に人間なんて皮肉なもので、けれど、今は己の存在を一人でも忘れずにいてくれることが慰めになり幸福です。何もできぬと思っていた私に、ビーズ刺しゅうを勧めてくれる職員があり、何

い心が和み、やっと完成しました。

小さな物ですが、一つの可能性を克服した気持ちで嬉しくて、寮母長に小包みにしてもらい、早速別便にて送りました。人の可能性と光の向くままに生きるヒマワリ……。自分も今は光を

あやめ会で、楽しい毎日を

昭和二十年十二月から美容院をはじめから三十六年目になる。現在は、娘さんと従業員二人の美容師にまかせ、忙しいときにお手伝いをする程度。

それでも、「いそがしくていそがしくて」。私は八方美人で、いろんなところへ

昭和二十年十二月から美容院をはじめから三十六年目になる。現在は、娘さんと従業員二人の美容師にまかせ、忙しいときにお手伝いをする程度。

それでも、「いそがしくていそがしくて」。私は八方美人で、いろんなところへ



喜怒哀楽の

人間的感情

このごろ何か淋しいというか、物哀しい気持ちでいたところでしたが、読み進むにつれて鼻汁と涙で顔中がグシャグシャ、同室者に知れぬよう、そっと車椅子で洗面所へいき顔を拭きました。

さいきん、二〇三高地の乃木希典の「愛は死にますか」をみました。己の体毎日の生活を戦場と考えるならば、銃後の人々の苦悩、貧困、愛絆、しがらみ、闘いを指揮する人たち、おおよそ障害者の生活にも当てはまります。つい最近まで自分も闘う戦士と考えていました。今ごろは、人生は開いて、協力であり相互扶助の尊さを身を持って知りました。国際障害者年のスタートにおいて障害者サイドで見直し、マナーなどを身につけようと思っております。

もう食事の時間です。体力も限界かと思えます。詩吟など、今度は声の便りをします。院長はじめ皆さまの健康を祈ります。

(岡山県津山市瓜生原366の1 社会福祉法人 重度身障施設 みずすず荘13号室から)

バスは終点は猪谷。降りると、赤い神袂橋がみえてきた。一瞬、暗い影がよぎる。昭和二十四年九月二十四日、この橋の橋梁が落下し、二十九人の教師が、急流、巨岩に投げだされて殉職した悲しい場所だ。このときも取材に関係していた。設計の不備などがわかり、憤りを紙面にたたきつけたものだ。

橋のすぐ下流(左岸)に慰霊塔があるので、久しぶりに両手をあわせた。「先生、どうして死んだの」と、涙ながらに訴えた児童らの声は、もう遠のいていた。いまは、満々と湖水をたたえた深淵幽玄の景勝地となり、マイカーで賑わっている。当時の児童たちも、社会の中堅層になっている。

(師魂よ、湖底で安らかに眠ってください)と、そっと、かたりかけた。

(平和な暮しが一番いいなあ)と、つくづく思った。それにしても、現在と過去を結んだ喜怒哀楽の人間的感情がヒタヒタと押しよせてきた一日でもあった。(T)

※ ※ ※

取材メモから

久しぶりに遠出した。その前夜は、なんとなくウキウキした。あの小学生のころの遠足のときの気持ちである。「大地を踏む」の取材で、目的地は神岡町。

雄大な飛騨の山なみにいだから、清らかな高原川の流れて生きている町。その町に住んでいる塚腰実子さん(六八)を訪れたのは、ちょうど、神岡まつりの五月四日であった。

神岡線のひだ船津駅が午前九時五分という早い時間だったが、軒(のき)なみに、ちようちんがゆれ、遠くからタイコ音が、みどりの風に乗って流れてくる。いい風情だ。

(どこへいっても、お祭りはいいもんだなあ)と、さらにウキウキ。

取材をおえたのは午前十一時ごろ。実子さんが「このお祭りの行列はいいでな、赤飯でも食べてゆくりしていきなさいよ」と、すすめた。が、辞退して午後一時発のバスをみつけて乗った。それでも、雅楽と舞、奴道中、シシ舞、ミコシ練りなど、子供たち中心の伝統芸能を、ちよっぴり味わわせてもらった。

バスの車窓から神岡山が目に入ってきた。いまから十数年前に取材で神岡山を訪れたことがあった。あの「イタイイタイ病」さわぎのときである。あのときは殺気だっていた。それこそ、神岡町全体がくらくらに考えていたものだ。だが、いまは……。そんな気持ちはなにつわいてこなかった。

× × ×

バスの終点は猪谷。降りると、赤い神袂橋がみえてきた。一瞬、暗い影がよぎる。昭和二十四年九月二十四日、この橋の橋梁が落下し、二十九人の教師が、急流、巨岩に投げだされて殉職した悲しい場所だ。このときも取材に関係していた。設計の不備などがわかり、憤りを紙面にたたきつけたものだ。

橋のすぐ下流(左岸)に慰霊塔があるので、久しぶりに両手をあわせた。「先生、どうして死んだの」と、涙ながらに訴えた児童らの声は、もう遠のいていた。いまは、満々と湖水をたたえた深淵幽玄の景勝地となり、マイカーで賑わっている。当時の児童たちも、社会の中堅層になっている。

(師魂よ、湖底で安らかに眠ってください)と、そっと、かたりかけた。

(平和な暮しが一番いいなあ)と、つくづく思った。それにしても、現在と過去を結んだ喜怒哀楽の人間的感情がヒタヒタと押しよせてきた一日でもあった。(T)

※ ※ ※

取材メモから